

佳作

檻の外から連れ出して

素以エチカ

坂の上の洋館に住んでいて、そのことをみんなが羨ましいという。一周するだけで軽く犬の散歩になりそうな広い敷地に、童話みたいな白亜の洋館、おまけに庭園。こうしてみると確かに

聞き覚えはいいけれど、私はあの古びた木造建築に特有のかびくさい臭いあまり好きではないし、好き放題に草むした庭や、もう何年も掃除していないホコリまみれの部屋には立ち入らないようにしているくらいだ。敷地がすぐに荒れてしまうのは手入れや掃除をする人手が足りないせいなのだけど、そもそもパパと私のたつたふたりで暮らしていること自体が分不相応なのだ。

お金はあるんだし人を雇えばいいのに、といつも不満を漏らしつつ結局掃除するのは私で、まったく気にも留めない様子のパパは「愛子^{あいこ}がやってくれるからいい」だなんてコーヒーを飲みながら笑う。「愛子は本当にいい子だね」と頭をなでられただけで掃除でも草むしりでもなんだってやれそうなくらい嬉しくなってしまう単純な私も私だけど。だから掃除するといつても私の手の届く範囲、立ち入り禁止の西館を除いて、よく使ういくつかの部屋だけ。それ以外はもう手のつけようがないし、手の施しようもない。私に言わせれば、ほとんどお化け屋敷かその類。古くてでかいだけの洋館なんて、みんなが思っている

ほどきらびやかでロマンチックなものではないし、そんなどうでもいいことよりも私が自慢したいのはパパで、私はパパを愛している。

幼稚園にいた頃、母の日に似顔絵を描いてみようという日があった、そこで私はパパの絵を描いた。下手つびだけど、パパのまるいメガネも灰色の髪もちゃんと描けた力作だ。でも当然まわりの子供たちは自分たちのお母さんを描いていて、私の絵を見て笑うのだ。

「愛子ちゃんのお母さんはお父さんなの？」

よくわからない。お母さんは昔からずっといないし、どこかへ行ったまま帰ってこないらしい。もちろん会ったこともない。お母さんとかお父さんとか、そういう役割みたいなものになんか意味があるのかわからない。だから私は笑われても怒らなかつた。私にはパパがいて、それだけで十分なのだ。いつも仕事で忙しいパパは家事をほとんどやらないけれど、それくらい私が頑張ればいい。

あいさつはきちんとすること。夕方五時までには帰ること。嘘をつかないこと。たくさん本を読むこと。本だけじゃなくて、たくさん身体で学んで、よく考えること。人を傷つけないこと。

人の喜ぶことをすること。パパの部屋がある西館には立ち入らないこと。その他にもたくさんの言いつけを、私はできるだけ守った。そうすればパパは私を「いい子」だとほめてくれる。優しく頭をなでるその手はごっこつとして大きく、とても温かい。それだけで私はすぐに胸がいっぱいになるのだ。だから困っているおばあさんがいれば迷わず助け、私よりも小さな泣いている子がいれば泣き止むまでなだめてあげた。私は優しくして思いやりのある人間になりたかった。あまりに幼すぎた私にとって、それだけが生きが이었다。

「ごちそうさま。いってきますー!」

ばたばたと駆け出して、朝日のさす坂道を下る。まだ少し肌寒い朝の空気を胸いっぱい吸い込んで、白い息を吐き出した。小学校までのほんの少しの道のりが待ち遠しい。生き物係だった私はその日、学校で飼っている鶏小屋の掃除をすることになっていた。小屋にはおんどりとめんどり、合わせて三羽。たまに巣に卵を見つけたら先生に伝えて手渡すのも仕事のうちだ。曜日ごとに各クラスの生き物係が担当することになっていて、今日は月曜日だから私のクラス。べつに朝早くにする必要はないのだけれど、朝のニワトリの鳴き声を浴びたかったのだ。まだ生徒が一人もない学校に、つうと伸びる大きな鳴き声。コケッコッコー。小学校へあがるまでニワトリが本当にそんなふうに鳴くなんて知らなかった。コケッコッコー。鳥小屋に着いて、目を合わせるなり鳴きだす三羽。自然と私の口元もほころぶ。「まって、いまごはんあげるからね」

エサをアルミの皿にあげ、獣臭い鳥小屋のなかへと入る。ニワトリたちがそちらに気をとられている間に、古いエサ皿を片付けて、散らばったフンやくずを掃き集めていく。ずいぶん慣れたものよと我ながら感心だ。首をくいくい動かしながらエサをついばむ可愛いニワトリたち。人間でなくとも、嬉しそうにしている様子を見るのは気持ちがいい。初めて私が鳥小屋へ来た時には警戒されるどころか激しい威嚇まで浴びたものだけに、ニワトリたちももう私には馴れたのだろう。今日まで過ごしてきた時間とか愛情とか信頼とか、そういうものの存在はなかなか大きいものだなと考えさせられるけれど、それらは一瞬ですべて壊れてしまうのだということも、すぐに私は思い知る。

くちやり、と足の下で音。

何かが潰れた音だ、ということは反射的にわかった。思わず手から離れたホウキが倒れると、ニワトリたちは相変わらずとぼけた顔でばさばさと羽を鳴らし、抜けた羽、ちりくずや敷かれたわらが舞い上がるなか、私は一步も動けない。悲鳴も出ない。それよりも吐き気が勝った。おそろおそろ踵を持ち上げ、離れた足の下には影。

そこには割れた卵があった。割れて、中から溢れ出す透明の粘液が糸を引く。そこには微かに血の色も混じる。殻の中、潰れひしゃげているのは赤黒い肉の塊で、割れた隙間からは手足、くちばしのようなものまで見えた。透けた血管に包まれた曖昧な肉。弱々しく脈打つ命の名残も次第に薄れ、やがて消えた。孵化する前の、未完成の雛だった。

後ずさる軌跡に、薄く血の跡が残る。こぼれた肉片には白く濁った目玉がついていて、目が合ったような気がした。慌てて鳥小屋を飛び出し、そこで私はしきりに嘔吐した。胃が空っぽになるまで吐いてから、臉を閉じる。浮かぶのはパパの顔。その微笑みに、後ろめたさを覚えた。

ごめんさい、パパ。私は今日、ニワトリの雛を、生まれもしないうちに殺しちゃったの。私はいい子なんかじゃないんだよ。

ニワトリたちはまだエサをつつきながらのんきに鳴いていた。私はもうその鳴き声を聞きたくなくて、それから二度と鳥小屋へ近づくことをやめた。

先生にその日あったことを打ち明けると「仕方がないことだから気にしなくてもいいんだよ」だとか「白河は優しいんだね」だとか、いろんな言葉をかけられて、でもそれが私にはどうしても受け容れられなかった。本当に大丈夫かい、と聞かれて、とっさに微笑みをつくると先生も満足そうに笑い、その話は終わった。ニワトリの雛を殺してしまったことは、他の誰にも言わなかった。パパにさえ。

「どうしたんだい、愛子」

銀のスプーンがカチリと皿に触れた。長いテーブルには夕食が並び、すでに湯気は立たなくなっていた。見上げると、正面に座ったパパが手を止めて私に微笑みかけている。

「ううん。なんでもないの」

目の前の皿には、ケチャップで味付けされたスクランブル

エッグ。不精のパパがよく作る料理だった。脳裏に浮かぶ雛の死体を振り払い、私はかき込むようにしてそれを飲み込んだ。

「今日、学校の先生から電話があったが、何かあったのかい」

また、手が止まりそうになる。それでも私は笑顔で応え、

「ううん。今日はちよつと早起きしすぎちゃって、寝不足きみだったせいかな。別に何でもないよ。それよりパパ、これおいしい！」

「そうか、そうか。でも愛子、早起きするのもいいけど、今度からはしっかりと寝るんだぞ」

「はい」

その日、生まれて初めて私はパパに嘘をついた。

坂の上の家での日々は、それからもずつと変わらなかつた。少なくとも表面上は。私はパパの言いつけを守り、パパの喜ぶように振る舞った。

「愛子は本当にいい子だね」

相変わらずパパはそう言つて私の頭を撫でるけど、私はもう前みたいに素直には笑えない。こんなふうにはめられるたび、引きつる頬に奥歯を噛みしめ、心のなかではあの雛を踏み潰した瞬間のねばつく感触、吐き気の味を思い出している。

それでも私はパパに愛されなくなることのほうがずっと怖い。ずつとふたりに生きてきて、パパは私にとつての全てだ。だから、いい子になれない私は、せめてパパの前ではいい子として振る舞おう。この振る舞いが嘘だという自覚も違和感も、すべて抱えて生きていこうと思った。

ごめんなさい、パパ。私は今日も猫を殺してしまいました。その日は梅雨の初めで、雨が降っていた。傘の尖った先端にはべつとりと血がこびりついていて、この細い五月雨の中では落ちそうにもなかった。だから私は猫といっしょに傘を公園のゴミ箱に捨てて、濡れながら帰る。脚の震えがようやく収まったことに安心しながらも、ついさっき聞いた猫の短い断末魔に胸を痛めた。

今度は偶然ではなかった。明確な悪意が私の中にあつたと思う。

放課後、学校で知らない男の子に付き合ってくれと告白された。もちろん「ごめんなさい」と断ったが、それでも今日の相手が食いで下ってきたのだ。一年生の頃からずっと好きでした、僕知ってるんです、白河さんは優しく、社交的なのに控えめ時々見せる物憂げな表情が可愛くて、だとか。それが本当に褒め言葉かどうかは別として、そんなふうに思ってもらえることはとつても嬉しいしありがたいことだけど、私は相手の言葉を聞いているだけで脚の震えが止まらなくなっていた。違うの。私はそんな子じゃない。なんとか震えを隠しながら、もう一度振り絞った声で「ごめんなさい」と一言。必死に気持ちを訴え続ける彼もそれで立ち去っていった。

中学にあがってからこれで三度目だ。彼らはみんないい人た

ちに見えたけど、私はその申し出をすべて断った。彼らが私の美点を挙げるたび、いつも私の呼吸は止まりそうになる。脚が震え、立てなくなってしまうのだ。私はみんなが思うようないい子じゃないんだよ。そんな言い訳が思考を満たして、私は本当の自分がいかに罪深いかを思い知らされる。

私は悪い子。

そのことを確かめるように、私は猫を殺す。犬もハトもスズメもガラスも殺した。手足をはさみで切り落としたり、口から裂くように切り開いたり、壁や地面に叩きつけたりもしたけど、傘で突き刺したのはこれが初めてだ。手についた血のぬめりに悪意の手触りを感じて、ようやく私の震えは消える。ごめんなさい。痛かったでしょう。本当にごめんなさい。そんなふうにならなくなって泣き出す私の傲慢さが、ひどくいびつだ。アスファルトですり潰されたそれらの死体にも似て。

涙は雨に紛れる。私は坂をひた上り、周囲にはなんの建物も見えなくなっていく。人の気配も薄くなる。歩道のない一車線の道路を覆うように木々は鬱蒼と深く、葉の上で大粒になった雨が、すでに張り付いて透けた制服に落ちてくる。薄目を開けて見上げた空は驚くほど狭かった。この数年間でずいぶんこの景色が変わってしまったのも、この道を通る人があまりに少ないせいだろう。薄煙り色の空を背にしてあるのは、白い私とパパの家だけだ。

錆びた鉄の門をくぐり、大きな玄関のドアを明ける。雨で湿気たせいだろう、少し膨張した木が軋んだ。濡れた格好のまま

入り、じゅうたんも敷かれていない石の床が水浸しになるのをぼんやり見ていると、玄関ホールに別の足音が響く。

「や、愛子。帰っていたのか」

「あ……たたいま、パパ」

この時間にパパが家にいるのは珍しい。だけど、ついさっき仕事が終わって帰ってきたというわけではなさそうだった。シャツの裾も出したまま、革のブリーフケースを小脇に抱えて小走りですっぴん。通り過ぎざまに、濡れた床に気付いた様子で立ち止まって言う。

「どうしたんだい、そんなに濡れて」

「これは……」

雨に濡れて困っている人がいたので、その人に傘を譲ってしまいました。そんな嘘が口をついて出そうになる。そうすればきつと、またパパは私のことを褒めるだろう。でも、その褒められる私はいったい誰なのだろう？ すべてが嘘で塗り固められた自分。嘘、嘘、嘘、嘘、嘘。その繰り返しの中でどんどん私が私から遠ざかる。捨てた傘。先端に血。細い断末魔。皮を突き破る時の、柔い抵抗と滑る肉。本物の私が汚くて残酷で悪い子だということを確かめ続けるこんな生活が、いつまで続くのだろう。日に日に彩度を失ってゆく世界が、停滞した時間の流れが、いつか私をその中に完全に閉じ込めてしまうのではないかという不安が膨らんで、それをどんなものもせき止めてはくれない。永遠に降り続くかのような梅雨の空気、そば濡れる服の重みと冷たさにさえ、私はもう耐えられそうになかつ

た。

「パパ、ごめんなさい。私、傘を……」

喉の奥が震えた。言葉にしようとするほど、心臓が痛いくらいに脈打って、呼吸が荒れる。それでもパパは私の言葉に耳を傾けてくれていた。さっきまであれほど慌てていたにも関わらず。

「傘を、捨て、の、捨てたの、猫、殺し、血が、私……」

それだけがなんとか言葉になって、あとは全てが嗚咽に溶けた。もうパパがこんな私を愛してくれないかもしれないことが何よりも怖い。でもパパに嘘をつき続けて、嘘で私を塗り固めていく人生も、同じくらい苦しいと思った。ごめんなさい、パパ。今までずっと心のなかでだけ吐き続けてきた懺悔の言葉が、ようやく声になってパパに届いて良かった。ようやく身の程の罰を受けられるのだと信じ、崩れ落ちそうになる私は、その寸前にしたたかな腕に抱きとめられた。

「愛子」

しかしその声は怒りなどではなく、慈しみに満ちていた。こんなに優しく名前を呼ばれたのは初めてで背中が凍る。私の声は父の胸の中でくぐもって消えた。

「辛かったんだね……でも大丈夫。愛子は何も悪くない」

私の頬を打ってくれるはずだった手は、私の頭をいつものように撫でる。だけど何も感じない。その手の大きさも暖かさも、触れられているという感覚すら不確かだ、存在が希薄になっ

「違う、違うのパパ。私はわざと殺したの、傘の先で」

「いいんだよ。わかってる」

強く抱かれ、言葉が詰まり、この人に何を言っても私を見てはくれないのだと、今になってようやく悟った。この人が見ているのは「いい子な愛子」で、今ここで震えている私ではないのだと。何をしても絶対に叱らないパパは、私のことをいい子だと思いついてるだけなのだ。

この人は異常だ、と。生まれて初めてそう感じた。

「寒かったろう。すぐにお風呂に入っておいで」

「うん、わかった。ありがとう、パパ」

涙はとつとつに枯れていた。私はそつと身体を離してから、頬に張り付いた濡れ髪をかきわけ、安心したような笑顔を作った。

「また仕事？」

「ああ。研究室から急に仕事が入って、いったん必要な書類を取りに戻ってきたんだ。少し長引くかもしれないけど、今夜中にはなんとか一度帰れるように打診してみるから」

「ううん、私なら一人でも大丈夫だから、気にしないで。急ぐんでしょ？ お仕事、がんばって」

「わかったよ、ありがとう。まためどが立つたら連絡するから」
「はいはい。いつてらっしゃい」

見送った背中が大きな扉に閉ざされて、私は一人、この大きすぎる洋館に残る。玄関ドアの向こうからは遠ざかる車のエンジン音といつの間にか強くなった雨音が届き、私はそれを聞きながらぼんやりと立ち尽くしている。今日はあまりにも疲れす

ぎた。このまま一步でも動けば崩れ落ちてしまいそうなほどに。だけどあの人のせいではないのだ。

私のついた嘘が、そこから生まれた齟齬が、どんどん膨れ上がって止まらない。私はいい子を演じておきながら、そんなふうに見られることに耐えられない。それは私の罪であり、私が招いた結果だ。どこにも逃げ場なんてなくて、どこまでも孤独。誰も私を見ていない世界で私は透明で、それを濁らせる苦しみと悪意だけが囁んだ砂のように残り、それだけが本当の私をかくかに示す。

私は悪い子。

完全に消えてなくなればいいのかもしれない。だけど、それすらできない弱い私は、今もなおあの人に愛され続けることを望んでいるのだ。その対象がたとえ本当の私でなかったとしても構わない。私は生きて、いい子を演じ続けよう。それで私がどんなに壊れてもいい。

私は悪い子。私は悪い子。私は悪い子。

心のなかで何度も繰り返した言葉を、神に祈るように呟きながら、私はこの先どんな罪を作り続けなければならないのだろうと考えていた。

窓の外が一度瞬き、やがて雷鳴が轟く。嵐は遠い。

熱いシャワーを浴びる間にも何度か地響きのような雷鳴が聞こえた。この梅雨入りの不安定な天気は一晩続きそうだった。ハンドルを回すと、キュツと小気味よい音を立ててお湯が止まる。滴る髪から水気を絞りながら、曇る鏡を手のひらで拭った。

鏡に写る自分の顔はひどくやつれて見えた。頬は痩せ窪み、泣き腫らした瞼の下で眼光に生氣はない。身体が浮腫んでいるような気もしたけれど、あちこちを手で触れて、特に変わりないことを確かめた。

考えれば考えるほど、父は異常だ。どうして父は私のことを叱らないのだろう。今回だけのことでなく、私は今まで一度だって父に叱られたことがない。私は愛されすぎている……。

そう思うと、父の言葉はまるで下手な演劇のセリフみたいにうわべだけに聞こえてしまう。この家のことだつてそう。四人暮らしならまだしも、たったの二人だけで暮らすにはこの家はあまりに大きすぎる。それだけで十を数える部屋をそれぞれ備えた東館と西館が、中央の玄関ホールでつながる構造。実際、物置としてすら使っていない部屋もいくつもある。パパの部屋がある入ったこともない部屋だつていくつもあつた。私が西館には立ち入らないこと——その言いつけを今までずっと守ってきたのだ。西館にはいったい何があるというのだろうか？そして同時に思い至るのは失踪したという母のこと。母はいつたどこへ行ってしまったのか。父は何かを隠しているのではないかという疑念が胸の中を侵し、今の今までずっと母について考えもしなかつた自分自身にも悔しさを覚えた。排水口に長い毛が吸い込まれるようにして流れ、どこか深いところへ落ちていくのを眺めた。

とりとめのない思考に消耗しながら、それでも身体が温まつたおかげで少しは元氣を取り戻せた気がした。じんわりと指先

に血が通う感覚。乾いたバスタオルで拭いてから、火照つた身体をチュニツクのバジヤマに通す。

まだ夕暮れからさほど時間は経っていないはずなのに、浴室を出た頃にはもう窓の外はすっかり暗くなつていた。家には私一人だけ、父の帰りはまだまだ先の話。チャンスは今しかない。私の足はそのまま、今まで立ち入つたことのない西館へと向かつていた。

こんなことをして本当によいかと不安は耐えず足取りは重い。だけど同時に顔が綻び、にやつく頬を隠せなくなる。ちょうどいい機会だ、これでまた私は悪い子でいられるのだから。

基本的なつくりは東館と同じはず。それなのに全く雰囲気が変わつて感じるのはこの埃っぽい空気だけのせいではない。照明はどこどころ切れていて、廊下には影がきれぎれに落ちる。きしむ床に蜘蛛の巣。薄暗いなかをひた歩く。

よくよく見ると、東館と西館はほとんど鏡写しのような構造になつていることに気付いた。館内の見取り図は何度も見たことがあつたけど、実際にこうして歩いてみると妙な居心地の悪さを感じる。私が今までずっとこの廊下を知らずに過ごしてきたという事実が、今更ながら可笑しい。どうして私は父の言いつけを守ってきたのだろう。バレなければいいじゃないかと今では思う。

一つ、二つと部屋を覗きながら進む。私が訪れた形跡がなるべく残らないように、細心の注意を払つた。けどどの部屋も中は空っぽで、もうずっと使われていないようだった。少しほつ

としながらも疑念は残る。父の部屋というのは、いったいどの部屋なのだろう？ 次に見えているあの部屋か、あるいはその向かい側、あるいは一番奥か。見つけてしまうだけで何かが終わってしまうのではないかという予感が灯る。父が私をここへ立ち入らせないようにしていたのはきつと仕事の邪魔だからではない。何か私に隠していることがあるはずだという確信。

再び緊張感が手のひらに滲んだ。悪意の蕾がとろけるような甘い匂いを醸し、それに誘われるようにして、私は一番奥の部屋へと歩く。間にいくつかの扉の前を通ったが、どれも使われていないような気がしたのだ。もし奥に何もなければ、帰るときにでも確かめればよい。

奥の扉の前にはかすかに水滴の跡。きつと父がさつき帰った時についたのだろう。だとすれば、やはりこの部屋で間違いないさそうだった。ここが、父の部屋。とたんに全身に汗が吹き出す。今ならまだ引き返せる。そう頭の片隅では感じながらも、私の手はもうノブに伸びていた。指紋がつかないようにバジヤマの袖で掴んで回す。

「あ」
鍵がかかっていた。試しに押ししたり引いたりしてみてもだめだった。そりゃそうか、とほつとする反面、鍵をかけるほど後ろめたいものが隠されているのではないかという疑念もまた膨らむ。特にこの二人しかいない家においては、それが「私に知られたくないもの」であることを意味するのだ。がちやがちやとむやみにドアを鳴らしながら、私は鍵穴からかすかに光が漏

れているのに気づいた。さすが古い洋館、鍵穴が貫通しているタイプのもので助かった。そつと顔を寄せて、中を覗いた。

まずは白い光。それから高く積まれた本の山が見えた。きつと研究のための資料か何かだろう。光に慣れて目を凝らすと、どうやら光源はパソコンのディスプレイらしいことがわかった。両音に紛れているが、よく耳を澄ますとうなるような機械の音も聞こえる。画面にはいったいなが映っているのだろう。鍵穴から見える範囲では像がはつきりせず、ただ一様に白い壁が映しだされているように見えた。さらに目を凝らそうとしたその時、視界が瞬く。爆発音のような雷鳴とほぼ同時に、明かりが消えた。白い光を放つディスプレイも同様に暗転し、パソコンとパソコンの切れる音が雷鳴の余韻に混ざる。

思わず叫びそうになつたけれど、声はかすれて出なかった。脈拍が早まり、意識がふつと軽くなる。壁に手をつけて、倒れそうになる身体をすんでのところで支えた。荒い呼吸、まとまらない思考の中で、ただ「停電だ」とだけ認識していた。

目の前は本当に真つ暗で、確かなものは手の触覚だけ。私は罪を咎められたような気分になり、慌てて立ち上がる。伝う壁に沿って、逃げるように隣の部屋に駆け込んだ。

閉めたドアにもたれて座り、まずは深呼吸。あの白いディスプレイはなんだったのだろう。そんなことを深く考える余裕もないまま、ただ落ち着くまでその場でじつとしていた。この部屋もさつき確認してきたいくつかの部屋と同じように、特に何があるわけでもない。ただ小さな棚が置いてあるだけで、中も

どうやら空のようだし。いい加減疲れたし今日はもう帰ろう、と腰を上げて、奇妙な違和感に包まれた。そういえば、どうして私は部屋の様子がわかるんだ？ 照明は落ち外は闇。ただ目が慣れたわけではないと、すぐに気付く。部屋の床、ちょうど本棚で下敷きになっているところからぼんやりと光が漏れていた。駆け寄って床に触れてみると、床板の隙間が筋になっていた。この下に何かある。邪魔な本棚を動かすのにはそう苦労しなかつた。床の隙間をたどると、半畳ほどの大きさの四角が象られた。ほとんど埃の溜まっていない床。それに、かすかに点々と水滴が落ちていいる。つまり父がここへ頻繁に訪れているどころか、ついさつきもここへ来たということか。探る手が冷たい金具をつかむ。ぞくりと背筋に悪寒が走り、もう引き返せないと思つた。

そのまま引き上げる。中の気圧による抵抗を軽く感じながら、その蓋を開けた。それが地獄の釜の蓋でないことを祈りつつ。薄明かりのなか、そこに階段が現れた。ゆるやかにねじれて奥まで続くそれは、その先にある何かに照らされて白く、どこかこの洋館とは似つかわしくない雰囲気を漂わせていた。

父はいつたい何を……？

息を飲み、下へ降りていくまでの判断に、数秒も要しなかつた。やけに足音が響く空間に囲まれる。その螺旋構造によるものか、あるいは少しずつ降りたせいだろうか。建物三階ぶんはありそうだと思うほど歩いてようやく、もう一つの扉が見えた。その覗き窓にはガラスが嵌められ、白い光はそこから出ている

ようだった。高い位置にあつて私の身長では中が覗けなかつたが、どうやらこの扉には鍵がかかつていない様子。重く分厚い扉を押し開けると、開けた景色に目が眩んだ。

四方八方に白い壁、過剰な照明。まるで病院のような清潔感で満ちている。そしてすぐ目の前に感じた気配に、私は腰を抜かした。

鉄格子に遮られたその向こうに、人がいた。部屋の隅、膝を抱えるようにして座り、腰まである長い髪を散らしている。生きているのか？ それよりも、

「あなた、誰なの？」

震えた声で、かろうじて尋ねた。びくと跳ねる肩と同時に視線がこちらへ向けられた。女の子、に見えた。前髪に隠れて表情は伺えない。

「ば……ば……ば……？」

「え」

少女の声で、確かに「パパ」と呼ぶのを聞いた。やはり父だ。間違ひなく、父はここへ来ている。しかし少女は私のことがよく見えていないのだろうか。

「私は……パパじゃない。よく見て、女だよ」

「うあ？」

少女は首をかしげた。あまりにあどけない仕草に、考えたくないような可能性に思い至ってしまう。私の腕は震え、それを抑えようともう一方の震える腕で握った。立ち上がれない。力が入らなかつた。すでに全身に透明の杭を打ち付けられていて、

今やっとそのことに気付いたような恐怖。あまりに異常すぎる出来事が続いて、もう考えることをやめたかった。でもこの嫌な予感ほ螺旋のように、どこまでも落ちてゆく。もしかして、言葉が話せないのか。もしそれが本場で、病気に拠るものでもないのだとしたら、この少女はいったいつからこの地下室に閉じ込められているのだろうか？ 誘拐、監禁……そんな言葉が真実味をもって迫る。

私は這いつくばって少女の方へと進み、格子を掴んだ。もう一度問おう。

「あなたは誰なの？」

ようやく少女は立ち上がる。長い髪がぼさりと落ちて、その白い肌が露わになった。細い腕と手足がシルクのようなロングのキャミソールから伸びる。ふらついた足取りで私に近づき、そして言った。

「わたし、あいこ」

視線と視線が交わされる。空白の時間が流れ、穿たれたように私の目は彼女に釘付けになる。前髪の間からぞいたあどけない表情は、私の顔と瓜二つだった。

格子に触れる手と手が触れる。体温が、脈拍が、ゆるやかに同調して、私たちを遮るこの鉄格子だけが強く印象に残った。

翌日、早朝に父が帰宅した。ちょうど起きて朝食の準備をしようとしていた私は二人分作ろうかと尋ねたが、またすぐ出るというのでトーストだけ二枚焼いた。できるだけなんでもないように振る舞った。声が震えないように必死に呼吸を落ち着か

せながらキッチンに立つ。そうするしかなかったのだ。もし昨夜の侵犯がバレればどうなるか、想像もつかない。私も同じように地下室に閉じ込められてしまうのだろうか。あるいは……。

どこかで母親がいるのではないかと期待していた私は少し複雑な心境だ。予想と違ったことばかりだったが、よくよく考えると母を地下室で見つけるというのも相当奇妙な状況だ。比べられるようなものではないかもしれないけれど。

「愛子、もういいかな」

オープンのかなでトーストはすっかりきつね色に焼けていた。慌てて「熱っ！」と取り出し、皿にのせた。父はそれをひよいとつまんで折りたたみ、椅子に座りもせず口に入れた。

「寝不足かい？」

ぎよっとした。父の微笑みに裏を見ってしまう。もしかしてすでに知られているのではないかと疑った。

「ううん。寝起きでぼーっとしてるだけ」

「しゃんとしなさい。それにしてもゆうべの雷はひどかったな。梅雨入りで少し不安定な天気になっているのかもしれないね。ちらほら停電も起きたと聞いたが、うちは大丈夫だったかい」

カマをかけられているのだろうか、身体が一瞬こわばる。でもきつと考えすぎだ、あくまで自然に振る舞わなければ。

「雷落ちたよ、どかーんって。そしたら停電もして。びっくりしたけど、落ち着いてブレーカーを上げたらまたちゃんと電気ついたから大丈夫」

「そうか。それは偉いなあ。もう一人で留守番してても安心して任せられるよ」

「小学生じゃないんだから、もう」

父の手が伸びて、私の頭に近づいた。驚いてとっさに飛び退く。しまった、と思った時にはもう遅く、父が驚いた顔で私を見る。

「……パンくずついでてる手でやめてよ。これから学校行くのに」

「ああ、そうか。ごめんごめん。それじゃパパ、また仕事だから。今日はいつもと同じで夕方には帰るけど」

「わかった。晚ごはんも用意しておくから」

「ありがとう」

父が出て行き、窓から車が走り去るのを見送ってから、ようやく安堵の溜息が漏れた。

学校に行くまでまだ時間がある。私はまたあの地下室へと足を運んだ。

「おはよっ」

眠り目をこする彼女がゆっくりと起き上がる。装いは昨日と変わらずキヤミソール。自分とそっくりな顔でこんなふうに肌を露出されるのはなんだか居心地の悪さというか、くすぐったさを感じてしまう。しかしよく見ると身体にはいくつもの痣があった。長い髪に隠れて目立たないが、こんなふうに傷をつけたのが誰かは考えるまでもない。その理由が見えないだけで。

「ん。はよ。パパ」

少女は立ち上がり、昨日と同じように近づいてくる。私の勝

手な想像だけど、私のことをパパと呼ぶ彼女はひよつとして、パパ以外の人間を見たことがないのではないだろうか？　そしてもう一つ思うのは、自分の姿さえよく分かっているのではないだろうか、ということだ。あまりに突拍子もない考えだけど、ありえないと断ずることも難しい。だから私は、制服の上着の内ポケットから手鏡を取り出し、彼女の前に掲げた。

「これが、あなた」

少女はそれを食い入るように見つめ、鏡の前で口を開けてみたり、瞬きをしたり、首や手を動かしたり、何度も確かめてからようやく鏡のなかの人物が自分自身であると気付いたようだった。私はそのまま鏡を少女の手に握らせる。少女はやつと目の前の人物が自分そっくりな顔をしていることを知ったのだろう、驚いたように私の顔をじつと見る。昨日はまだだったから、今度は私が挨拶する番だ。

「はじめまして。私の名前は愛子。白河愛子っていうの」

「あい……こ……」

「そう。愛子」

首をかしげる少女に向かい、私は昏い笑みを浮かべた。

監禁だとか傷だとか犯罪だとかこの際どうでもいい。むしろちよūdいじゃないか。誰にも本当の私を見てもらえない私には、この子がいる。この子の前だけでは、いい子になれない私を見せよう。私はこの子の前では自分自身を嘘で塗り固めなくともいい。自分で自分を苛む必要もない。私はこれからずっとここへ来る。そしてすべてをさらけ出し、作った罪のすべて

を懺悔しようと思う。ああ、これでやっと私は自由だ。

「私、昨日、猫を殺したの」

まずはその話からはじめよう。

三

「長かった三年が過ぎ、高校生になった私は、今日も父の外出の際にアイコのいる地下室へと足を運んでいた。終業のチャイムと同時に教室から消えるのがもはや日課となり、別の高校に恋人がいるだとか援助交際だとかまで噂が立ったこともあるけど、あなたが遠からずといったところなのがまた悩ましい。三年に及ぶ逢瀬のなかで私たちは親友とも呼べるような関係になつていた。互いに同じ名前呼び合う関係はいささかこそばゆいけど、それで困るようなこともない。

「ただいま、アイコ」

「おかえり愛子。今日は遅かつたじゃないの」

「バカ。誰のせいだつての」

アイコは相変わらずロングのキャミソールという装いで、あぐらをかいたまま読書にふけていた。今も痣は絶えないらしく、それについて一度アイコに訪ねてみたけど、露骨に避けられたので以後は触れないようにしている。毒々しい色の肌にはもう慣れたし、特に視線のやり場に困るということもない。私は鞆の中から二〇冊におよぶ図書館の本を取り出して、鉄格子越しに渡す。

「おお、あつたんだこれ……これもだ。いやー、ありがとう」

「本当、探すの大変だったんだから」

「別に今日じゃなくてもよかつたのに。急いでは言わなかつたはずだよ？」

「でもどうせ前の本も読み終わる頃だと思つて」

「さすが。ご明察」

アイコは部屋の奥の死角から、またも同じくらいの高さの本の山を抱えて戻ってくる。これは先週私がアイコのために借りてきた本だ。結局またずっしりと重くなる鞆だけど、これももう習慣になつていて、どうということはない。

「父にはバレてないでしょうね」

「ないない。本は見えないように部屋の隅に隠してあるし、私も昔のままずっと話せないフリしてるし。んう、あー」

そうならいいけど、と心配げに眉を寄せる私に、アイコはけらけらと笑う。

「にしても愛子は尽くすタイプですなあ。その性格を活かして友達でも恋人でも作ればいいのに」

「ほつとしてよ、もっ」

出会つてすぐの頃、言葉がほとんど喋れなかつたアイコの勉強のために、私の古い絵本を持ってきたのが始まりだった。それが終わると次は教科書。驚くような速度であらゆる分野の知識を吸収していくアイコのために、私はまた教科書だけではなく別のたくさんの本を持つてくるようになった。次から次へと湧いてくる要望に応え、古今東西あらゆる小説に辞書、哲学書、

歴史書などの学術書、社会学や心理学の研究論文、情報技術や工学などの技術書、漫画のコミックスや雑誌にいたるまで、様々なものを用意した。「たくさん本を読むこと」という父の言いつけを守っていたこともあり、もともと私もそれなりの読書家を自負していたのだが、アイコにはあつという間に追い抜かされてしまった。

「いつの間にかアイコのほうがすっかり読書家だ」

「そんなことはないよ。私は単純に興味っていうか、読書くらいしかすることがないから」

「ううん、アイコはすごいよ。だって私はもう全然興味なんて沸かないし、そもそも最初からそうだったのかも知れない。父が褒めてくれるからそれになんとなく従っただけで、今はすごく苦痛だもん。このごろずっと学校の成績も伸びないし、ああもう。こんなことなら進学校なんて選ばなきゃよかった」

「ええー。でもその制服可愛いじゃん。似合ってる」

「はぐらかさないでよ」

だんだん落ちこぼれていく私を父はやはり叱らなくて、むしろ優しくいたわるような振る舞いをする。何をしても愛されたままでいられる私は、もはや何に対してもすっかり興味を失ってしまった。親子の愛情といってもそこまで無条件に愛情を抱けるものなのだろうか？ いまだ父の愛に執着する私は、同時に恐怖をも抱いていた。地下室にひとりの人間を閉じ込めておいて、どうしてあんな風に笑えるのだろうか。父の微笑みの不透明に、私への愛が本物かどうかも分からなくなってしまう。

ああ、でも、私だって同じか。

「愛してるよ」

鉄格子の向こう側から、細い腕が伸びた。か細い力で抱き寄せられ、私の唇が体温を知った。螺旋に落ちていた思考が呼び戻されて、目の前にはアイコだけが映る。ああ、そうだ。私は何に対しても無関心になったわけではないのだ。ただ唯一、アイコだけが私を導く光。共犯関係にも似た、溶けるような口づけのあと、ゆっくりと唇を離してアイコは繰り返す。

「愛してる。私だけが、本当に愛子を」

舌をなめずり、甘い罪の味。父からの愛に執着する私を、アイコはいつもこの言葉で引きはがそうとするのだ。白い繭に包まれたような頭で、私もアイコの耳に囁きを返す。

「私も愛してる。私にはもう、アイコしかないの」

だけど、そんなアイコが本当は社会的には存在していないはずの人物であることを、私は知っている。中学時代の終わり頃、受験のための手続きのなかで戸籍謄本というものの存在を知り、その写しを取り寄せることになった。しかしそこに記載されていたのはただ父と母と子が一人、そのどこにもアイコの存在を示す証拠はなかった。おかしいと思っただけで出生記録を調べてみても、自宅出産だったことしか分からない。そこでも、ただ一人の女の子だけが生まれたということになっている。それでもきつと私たちは双子だ。DNA鑑定にかけるまでもなく、それは間違いないと思う。でなければあまりに似すぎている。アイコのほうがややや痩せ気味で背も低いけど、それはきつとこの

地下室での生活によるものだろう。それ以外の身体の造り、骨格や声の質、手の形までそっくりで、これが双子でなければいけないのだというのか。

浮かぶのはひとつのストーリー。母が私たちをこの家で産んだとき、父は双子の片割れを地下室へと閉じ込め、もう片方をただ一人の娘として出生届を提出、何事もなかったかのように育てた、というものだ。私とアイコはただ選ばれたか選ばれなかったかというだけの違いで、今この鉄格子を隔てて生きている。ひよつとするとこの白い部屋のなかには私だったかもしれないのだ。

白い部屋。しかしここには生活に必要なものが一通り用意されているようだった。部屋の奥にはトイレやシャワーもついている、空調設備も完備。おそらく電力は独立電源から供給されているのだろう。地上のぼろ洋館よりもよっぽど綺麗で衛生的な空間だ。食事や着る服はその都度父が持つてくるのだという。そしてこの鉄格子。

「ねえアイコ。本当にここから出たいと思わないの?」

「ああ、もう。だから何度も言ってるじゃん。出たくないんじゃないかって、出られないんだって」

アイコが鉄格子の端に取り付けられたカード錠を示す。確かに、カード型の鍵がなければ、ピッキングしてこじ開けることもできない。でも鍵さえ手に入れてしまえばいいのだ。アイコの話では、カードキーはいつも父が懐に持っているという。そこまで分かっているのだから、何かとやりようはあるはずだ。

「私はアイコの気持ちが届きたいの」

「うーん、よくわかんない」

アイコはそのまま床にごろんと寝転び、間延びしたあくびを漏らした。私が真剣に話すといつもこう。飄々と躲されるようでもどかしい。そんな私の気苦労も知らないで、アイコは続けて言う。

「たぶん杭につながれた象みたいな感じなんだろうと思う。象使いがどうやって像を手はずけるのか知ってる? 子供の頃に杭につながれた象はいくら暴れても逃げられないことを悟ると、大きくなって杭なんて簡単に引っこ抜けるような力がついてもなお、自分が杭から逃げようとは思わなくなる。杭は抜けないものだって思い込んでるんじゃないか」

「でも、アイコは象じゃない。私、アイコのためならなんだってするよ。父のところからカードキーを盗めば、すぐにだって」

「うん、まあ。確かに私は象とは違う。私には愛子がいるから」
アイコはむくりと腰を起こし、私を見上げる。急に向けられた鋭い視線に思わずたじろいでしまうけど、さらに追い打ちをかけるようにアイコは語気を強めて、

「でもそれはリスクが高すぎる。愛子が傷つくかもしれないよ。うなことを、私は望めない」

ああ、そうだ。アイコはこういう子だった。自分のことよりもいつも私のことを気にかける、優しい子。父が望んだ「いい子」はきつと私なんかじゃなくてアイコのほうだと思ふ。けれど、もうこの話は終わりだともいうように、そっぽを向いて

新しい本のページをめくり始めるアイコ。私は彼女の背中に、乾いた言葉を投げつける。

「いいよ、べつに。私はいくら傷ついてもいい。それくらいの罪は犯してきたから」

「……ああ、今日も懺悔かい？ いいよ、話してみな」

ぼたん、と本が閉じられる。それを合図に私はまた自分の罪をさらけ出す。今日はクラスの佐々木さんが担任の先生の不倫相手だという噂を立てたよ。おとなしい子で、先生くらいしか話し相手がいなかったのに、かわいそうだね。

私は本当にひどいことをした。

しばらくして佐々木さんと担任の先生が同時に学校からいなくなり、私は泣く。彼らがその後どうなったのか知る由もないが、聞いた話では先生と佐々木さんの間には本当にそういった関係があったらしい。だけど噂は噂。私の流した噂だって作り話のつもりだったのだから、本当のところはわからない。ふたりが去った跡に、私の苦しみと悲しみだけが残る。

ただどこからか噂を流した犯人が私だと伝わったのだろう、すぐに校長先生から呼び出しを受けた。厳しい追及はなく、ただ叱られた。しかしそれはきつと添え物の建前に過ぎなくて、本当は口封じをしたかったのだと思う。この学校でこういう事件があったことはむやみに人に話してはいけません、もちろん今後も似たようなことが起こった場合はまず学校に報告すること。あなたみたいな真面目な子がねえ、とも言われたがなんとも思わない。今日親御さんに連絡するから、ちゃんと話し合っ

て反省しなさい、と言われてようやく後悔の念が湧いた。

「愛子は悪くない。そうだろうっ？」

父の前で私は俯き、何も言えなくなってしまう。口を開けばそのまま胃の自身がひっくり返りそうだった。私の全てを肯定する父の言葉が本当に愛情によるものか分からない。ただ思うのは、これが本当に愛情によるものであれば、それこそ救いがない、ということだけ。

これまでずっと父の愛を求めて止まなかった私だけど、いつの間にかその気持ちも擦り切れていたのかもしれない。あるいは、ずっと前からなんとなく感じていたのだろう。ようやく私は、父の私に対する愛が嘘なのではないかという疑念を胸に確かに抱いた。アイコの言うとおり、私を本当に愛してくるのはアイコだけなのかもしれない。

「先生とその生徒はきつと本当に罰せられるようなことをしたんだろう。それが露見して制裁を受けるのは当然のことだ。逆に愛子を責める理由はどこにもないと、パパは思う」

けれどこれは私だって同じこと。私もまた同じように、父を欺いてきたのだから。私は小さく頷いて、

「うん……そうだよ。ありがとうパパ」

蝟燭の炎のように、終わるときは一瞬だ。このとき父と交わしたほんの少しの会話だけで、世界は静かに反転した。父の愛に支えられてきた過去の自分がすっぽりと抜け落ち、そこにあったはずの存在を保証するものがどこにもなくなった。父の言いつけを守り、守るふりをしてきた過去はいったいなんだっ

たのだろう。私を縛り苦しめた愛が嘘だったのなら、その残りかすをどんなふうには私は肯定してやればいいのか。私は今までずっと、何のために罪を作り続けてきたのだろうか？

その夜は眠れず、朝を迎えても学校には行く気になれなかった。父が出かけるのを見送って、私はまたアイコに会いに行く。もう私は父に対してこれまでのように振る舞えそうになかった。いい子を演じる理由も失った。私はこれからどうすればいいのかわからなくて、それ以上にただぬくもりが欲しかったのかもしれない。アイコはすぐに鉄格子越しに私を抱きしめて、ただ撫でてくれた。アイコが双子の姉だったらしいのにと、このとき初めて思った。今はとにかく甘えていたかった。

「ほら、やつぱり。パパの愛情は本当の愛情なんかじゃない。本当に愛子を愛せるのは私だけだ。パパの知らない愛子を私はずんぶ知ってるんだから」

「うん、うん」
私はただひたすらアイコの言葉に頷いた。アイコだけが正しくて、私はそれに縋るだけ。アイコは私のすべてを抱きとめてくれる。かつてどんな罪を打ち明けられても、それをただ一様に肯定も否定もしなかった。どんなときでもアイコは正當に私を見てくれた。本当の私を見てくれた。

「もう、いいんだよ。そのままの愛子でいい。いい子になんてなれなくてもいいんだ」

そして愛子がゆっくりと私の身体を離し、肩を掴んだまま私と目を合わせて言う。

「だから愛子、パパに話すんだ」

「え？」

「今までの罪も嘘も、全部パパに打ち明けるんだ。もちろんここで私と会っていることも。もう自分を苦しめる必要はないんだ。ちゃんと話せば、きっと分かってくれるよ」

「いや、でも」

突然の言葉に戸惑いを隠せない。それよりも私はアイコとふたりでここから逃げ出したかった。どこか遠くの知らない街で、ふたりで暮らす物語を夢想した。だけど、同時に信じるしかないとも思う。今の私にできるのはただアイコの言葉に頷くことだけだった。

「うん、わかった。全部話すよ」

手をつなぎ、背中合わせに座る。触れる鉄格子の冷たさも気にならなかつた。不安も恐怖も、すべて手のひらのぬくもりが溶かし、勇気だけが残る。私たちはたくさんのことを話しながら時が過ぎるのを待ち、あつという間に夜だ。熱を帯びた頭も次第に冷めて、私は何度も考えてきた疑問を、ようやくアイコへとぶつけた。

「ねえ、アイコはどう思う？ 父がどうしてこんなことをするのか」

本当は心のどこかで考えないようにしてきたのかもしれない。アイコはきつと何か知っているという思いが、むしる私を真実から遠ざけていた。結ぶ指に、自然と力が込められる。少し考えてから、アイコもまた私の指を強く握り返した。

「私は、これが何かの実験なんだと思う」

「実験？」

「同じ姿勢の双子をまったく別の環境に置くことで、その変化と原因を探る。似たような実験は過去にもいろいろなところで例があつて、それ自体はそう珍しいものではないと思う」

直截的な言い回しを避けているものの、私はアイコの言葉に確信に近い響きを感じ取っていた。アイコはきつと何か核心となる事柄について知っている。あるいは私が重大な何かを見落としているのか。もつたいぶるようなアイコの表現がもどかしく、私は急かすような早口で尋ねる。

「もしそうだとしたら、それじゃあこれは何の実験なの？」

さざなみ立つ私の言葉。その語気、荒れた呼吸をなだめるかのように、碇泊する船のような穏やかさでアイコは微笑む。

「愛の実験」

ゆつくりと移ろう意識がその時確かにとらえたのは、初めて見るアイコの悪戯にも似た悪意の笑みと、もう一つ。地上から響いて聞こえる車のエンジン音だった。入り口の分厚いドアを開けておいたおかげで、車が停まる音もここまで届く。父が、帰ってきた。

「それじゃあ、私、話してくる」

「立ち上がり、結んだ指がほどける寸前、

「うん。健闘を祈るよ」

アイコは初めて会った時のようなあどけなさで、歯を見せて笑った。

私は広い玄関ロビーに立ち、父が扉を開けるのを待つ。この建物のこの広さも、本来なら四人で住むはずだったもの。父と母と私とアイコ、四人の家族。失踪した母が今もどこかで生きているのだとしたら、そんな生活も全くありえない話ではないはずだ。何よりも私はこの先もずっとアイコと一緒にいたい。取り戻そう、と胸に誓った。

きしむ扉。夕空を背後に、父の姿が現れた。きれいな折り目のついたスラックスに、白いワイシャツが目まぶしい。

「ただいま。……おや」

その視線がすぐに私を捉えた。穏やかな、欺瞞に満ちた目。「今日、学校を休んだそうだが。調子のほうは」

「パパ。話があるの」

父の言葉を遮り、切り出した。笑みを浮かべず、睨みをきかせず。ただ毅然とした態度で、平然と立つ。一方で父はいつものように穏やかに応えて、

「ふむ。話とは」

「私の罪について」

しかしそこでようやく父の表情が、かすかに色づく。かつて何度か見た顔だ。私の懺悔を拒否し、いい子でいさせようとする時に見せるそれ。だけど、今度こそ逃さない。

「……どうしたんだい。話してごらな」

「立ち話でいいのなら、今ここでもいいけど。長くなるからソファにでも座れば？ 空いてる客室、たまには使わないとね」

「……いいだろう」

客室は東館、玄関から出てすぐの部屋。骨董品とがらくたが一緒くたにされ壁に沿って並ぶ、物置代わりの飾り棚。スイッチを入れるとぼんやりオレンジ色の明かりがついた。薄く積もった埃を払い、ソファに父を促す。

「ああ」

父の腰が深く沈む。その様子を見下ろして、立ったままで私は口を開く。

「まず私がパパに言っておかなきやいけないことがある」

深く息を吸った。

「私はパパが望んだようないい子なんかじゃない。私は、悪い子なの」

やっと言えた。

私がついてきた嘘、守らなかつた言いつけの数々。作ってきた罪の話。言葉を用意したわけではなかつた。それでも湧き上がるように、黒く汚れた記憶は呼び覚まされていく。小学生の頃、産まれる前の雛を殺した罪が、それを隠すように初めて嘘をついた罪につながったように、嘘は嘘を塗り固め、罪は罪へと連鎖する。脈々と広がる網の目の一つ一つが私の罪で、毛細血管のような密度で私を象る。私の存在がこうして編みあがったものだと、しつこいくらいに繰り返す。いい子になれない私は悪い子。ただそれだけを伝えたかつた。

父はどんな反応も示さないままそこに座っている。ぴくりともせずただ微笑みを作り、凍ったようなまなざしで私を見ている。ああ、この人はやっぱり、心の底では本当に笑ってはいな

いのだ。昔からずっと、父はほんとうの意味で私に微笑みを投げてくれたことはなかつたのだ。だから愛も、私たちの関係も、全て嘘。でも今は私の話を聞いてくれている。

そして私は私の愛について語る。地下室での密かな逢瀬、過ごした時間。初めて会った日のことから今日のことまで、私たち姉妹がどんなことを語り合い、秘密を育ててきたのか。ただ一人私のことをそのまま受け止めてくれたアイコ。優しく賢い彼女は私よりもずっといい子で、憧れだった。いつでも私の懺悔を聞いてくれた。私にとつての母であり姉であり親友だったアイコ。今の私にとつてのすべて、まじろみのような甘い思い出について。その長い話を終えた時、私の視界が白く飛んだ。

「えっ？」

身体が浮いて、背中が叩きつけられるような感覚があった。何が起こったのか判然としないまま、次いで脳が左右に揺れる。水中にいるかのように、くぐもつた鈍い音が何度も遠くに聞こえた。殴られている、と気付いたのはしばらくしてからで、頬と腹部に浮かび上がるように鈍痛が走る。遠くだった音は耳の中から聞こえるみたいに響く耳鳴りに変わる。獣のような呼吸。それが自分のものかどうかも判らない。次第に視界は戻り、しかしどういいうわけか真っ赤に染まっている。ぶつかった飾り棚が倒れ、崩れ落ちる装飾品が辺りに散らばっているのが見える。そして目の前には父が笑いながら今まさに私の足を逆向きに折るのが見え、

「ずっと前から知ってたよ。お前が悪い子だつて」

叫び声を上げるよりも先に、意識が途絶えた。

アイコ。助けて。

薄靄がかつた頭で、ずっとその名を呼んでいた。アイコが私の全てで、救いだ。だから祈る。だけど同時に、ぼんやりと思うのだ。その思考がどういう意味をもつのか自分でも理解しないまま、考えている。アイコが私の全てなら、アイコこそが愛子なのではないかと。私はどこにいる？

背中に焦げるような痛みを覚えた。まだ赤い視界は下から上へと流れ去る。引き摺られたまま階段を降り、ゆるやかに螺旋を描いて落ちていく感覚。意識が戻り、まだ自分が生きているのだと実感するまでにしばらくかかった。曲がった足を父に掴まれ、私は西館の地下、隠し階段のなかにいた。

「パパ……なんで、こんな」

かすれた声を絞り出す。それから血を吐いて咽る私を見て、父は楽しそうに笑う。

「あは、目が醒めたか」

言いながら、歩くペースは変わらない。私の重い頭が階段をひとつずつ落ちていく、ゆっくりとしたテンポと合わせて、父は言う。

「なぜか。それはお前が私の実験をめちゃくちゃにしたからだ」

ああ。確かアイコも言っていた。なんだっけ。よく思い出せない。

「知っていた。知っていたとも。地下室は常にカメラで監視している。初めてお前が地下室を見つけた日の録画データを見て、

私は本当に驚いたよ。いや絶望したといったほうが近い」

父は笑う。絶望という言葉が心の底から可笑しいとでもいうように。

「このときすでに私の実験は失敗したと悟ったよ。だが少し考えて、私は閃いた。このことが実験に与える影響は、別の要素によって相殺できるのだとね」

もはや父は私に向かって話していない。口調は昂ぶり、語り没する。思い出し笑いを囁み殺そうとする子供のような純真さが、声色に浮かぶ。

「それは、憎しみだ」

父はいったい何の話をしているのだろう。

「あえてお前たちの会合を見過ごし、何度も接触させることで、愛子はお前に対する憎しみを育む。それにより、お前が愛子に与える愛は相殺される。完璧だ。それで実験はうまくいくはずだった。……だが、今度こそ終わりだ。お前が全てを終わらせた。秘密を私に打ち明けてしまった。ああ知っていた、知っていたとも。だが私はもう見過ごせなくなってしまったのだ。お前は私の愛を疑い、秘密の逢瀬はもはや秘密ではなくなった。すべてを嘘として決定つけたのは私ではない。お前だ」

私には理解することができなかつた。もう何も考えられそうになかった。ただ言葉に宿る憎しみの矛先が私に向かっていることと、事態の責任が私にあるということだけはなんとなくわかる。

三半規管がうまく機能していないけど、いつの間にかどうや

ら階段が終わって平たい床の上を引き摺られているらしい。この目に映る床と壁と天井にはなんだか見覚えがある。ああ、そうか。全部真っ赤だから判らなかつた。もう、こは地下室だ。

鉄格子の前 投げ捨てられた私はアイコの姿を確かめた。さつきまで助けてくれと願ってばかりいたのに、そんな気持ちがいぼんで今は後悔に変わる。ごめん。ごめんねアイコ。私、うまくできなかったよ。私のせいでアイコまで傷ついてしまうかもしれないと思うと、どんな痛みよりも辛い。私はいつも取り返しつかない間違いを、後になって気づくのだ。どうしようもない後悔は不毛だ。それなのに私はまた間違えてしまった。

アイコが駆けてくる。勢いで鉄格子にぶつかり、がしゃんと音が鳴る。しがみつき、隙間から手を伸ばし、何度も私の声を呼んだ。届かない距離。私もアイコの指先に触れたくて、必死に手を伸ばした。力が入らない腕を、鞭打つように動かす。

「おっと」
寸前で肩を蹴りつけられ、私の腕は力なく床に伸びる。

「愛子！」
声も出ない私に代わり、悲痛な叫びが部屋に響いた。アイコは抜け殻のように鉄格子にしがみついたまま、力なくうなだれる。

電子音。父が懐から取り出したキーを錠に通し、格子の一部が扉になって開いた。

「お前も。愛子と同じように罰を受けなさい」
再び掴まれ、引き摺られる身体。父が先に扉を通り、続けて

ゆつくりと私の身体が鉄格子を横切る。あれほど強固に私とアイコを遮っていた境界が、床に残る私の血と交差する。部屋の中央までゆつくりと運ばれながら、それと同時に流れる視界に、私はアイコの肢体がナイフのように鋭く光るのを捉えた。

速い。腰を落としたまま、床を滑るように駆けるアイコが、あつという間に父の背中に回りこむ。見惚れるほどのしなやかな身のこなし。揺れるキャミソールから伸びる太腿には、ただこれだけのために鍛えられたかのような筋肉で無駄はなく。そして父がアイコの動きに気づくのは私よりほんの一拍遅かつた。それがきつと命取りになったのだろう。

アイコが腕を横に引くと同時に、父の首が浅く裂けた。
「あああああああああああああああ！」

裏返ったような叫び声、それから噴水のように吹き出す鮮血がこの白い部屋を侵す。父は尻もちをついて、首筋を押さえるその手の隙間から血がさらに溢れている。

「パパ！」

私はもう感覚もない腕を必死に動かして、父のもとへと這った。だけど、それよりも早くアイコが父の胸に跳びかかり、父は仰向けに倒れた。アイコが父にまたがる。そしてまた、アイコの腕が父の胸の上を滑る。父はくふう、くふうと呼吸を漏らして、耐えるように身をよじる。その様子を味わうかのように、アイコはその手で父の身体に傷を増やし続けた。

「アイコ！ もうやめて！ どうしてここまでするの……こんなこと。ねえパパ！ 死なないで、お願い……！」

叫ぶ私の言葉で、アイコの動きがびたりと止まった。這いつくばる私の指先が、ようやく父の頬に触れる。私の顔を見て、どういうわけか父は笑った。

「は、はは。お前はやはり私を愛しているのだな。だがそれも当然だ。なぜなら人間は自分を愛する相手を愛したがる生き物であり、そして私がお前のことを愛したからだ。ふ、ふふ。私がお前を愛したのはなぜだかわかるか？ 親子だからだ」

「違う。そんなものは愛とは呼ばない」

アイコが温度のない声で言う。

「そう、そうだ。それは本当の愛ではない。本当の愛とは無条件の愛だ」

私はやっと思い出していた。アイコが今日話していたこと。父は「愛の実験」を行っていたのだと。

「偽物ではない、本物の、無条件の愛だ。それは家族だからとか恋人だからとか、そんな条件に縛られない純粹なものだ。身も蓋もない言い方をすれば、すなわち根拠のない愛。私は……愛されたかったんだ。だからお前たちを利用した」

父は言葉の合間合間に何度も血を吐きながら語る。そのあまりの真剣さに、思わず吹き出してしまいそうだった。陳腐な言葉。脆弱な思想。そのどれもがあまりにも幼く、歪んでいる。

「誰からも愛されない人間が、果たして誰かを愛することができるとか？ それを確かめるのが私の実験の核となる問題だった。そう、だから私は自分の娘が産まれると知った時、娘を決して愛さないと決めたのだ。愛さず、ひたすらに痛みを植え付

け、苦しみを与えた娘にもし愛されることができれば、そこで初めて私は愛を知ることができると思じたのだ。それがお前だ、愛子」

父の呼ぶ「愛子」は、今まさにその父にまたがるか細い少女のことを指していた。植え付けられた痛みと苦しみ。それがつまり、アイコの身体に絶えなかつた痣のこと。今更になつてやつと、すべてが繋がりはじめていた。アイコこそが本当の愛子。父が本当に愛されたかつた相手。だつたら私はどこにいる？ 私には何の意味があるのだろうか？

「産まれた娘は双子だつた。片方は愛子。もう片方はサンプルに過ぎない。比較対象物としての、遺伝的に近い個体。私がお前だ。だがサンプルにも当然意味がないわけではない。本物の愛を検討するためには、偽物の愛だつて必要だろうか？」

あまりにも笑えない冗談。私はそんなもののために利用されてきたのか。

「愛されるために、愛さない。それが私の愛の実験の方法だ」

あまりにも愚かで哀れな父の言葉に、虚脱感におそわれる。こんなことには何の意味もない。きつとこの人には何も無いのだろう。誰からも愛されず、上手く他人を愛することもできず、最後までこうして一人で死んでいくのだ。だけど、そんな父に弄ばれた私だつて同じくらい愚かだ。

アイコは父の言葉を最後まで聞いていた。血だまりのうえで倒れる父の頬を撫でながら、嘔くように、
「でも失敗した」

無力な父を、無様な父を、まるで味わうかのような甘美な笑みで、言葉を継ぐ。

「パパは間違えたんだよ」

アイコのこんな姿を、今まで一度だって見たことがなかった。あまりにも冷たく憎悪に駆られたその瞳に、今は私の姿は映らない。

「ねえ、パパ。いいことを教えてあげる」

アイコの口元から涎が垂れた。その雫が父の目元に落ちて、父はとつさに目を閉じる。その瞼の真上にかざされた白い手先に、血に塗れた何かの破片が握られていた。ああ、私はそれが何か知っている。

「愛されるためにはね、愛されるための努力と嘘が必要なんだよ」

ゆつくりと、その破片の先が沈む。狂ったような叫びが部屋を満たしてこられます。吹き出すのは透明な液体。次第にそこに血の色が混ざり、父の左の眼球は音もなく潰れた。アイコはぬるりと破片を抜き取り、父の身体から離れた。汚れた破片をもう一度手に握り直し、そして今度は私を見下ろす。

「私は象じゃない。私には、愛子がいた」

「え？」

「パパの言うとおり、これは愛子のせいなんだよ」

うつ伏せの私の背中にアイコがまたがり、私の首を持ち上げる。逆さまに映るアイコの顔に、いつものような笑みはない。

「私は物心ついた頃にはもう、ここで暮らしてた。でもね、そ

れで不満なんてなかったんだ。私にはこの世界しかなかった。それ以外には何も知らなかった。それでよかったんだ。なのに愛子は私と出会ってしまった。たくさんの本を読ませてくれた。外の世界を教えてください。…そう、だから私が象じゃなくなったのは、その時だ。私はここから出たいと願うようになったんだ。でもそんな私の苦しみも知らず、愛子はいつも懺悔懺悔懺悔。外の世界でいろんな酷いことをしておきながら、ただ自分が楽になりたいがために、私に全てをさらけ出して…さぞかし気持ちがいいことでしょうよ。私はもうずっと気が狂いそうだった。その一方でパパからはひたすら暴力の連続で。たとえ嘘でも褒められたことなんて一度もない。愛子には心の底から嫉妬したよ。ねえ、そんな私が本当に愛子のことを愛していられると思う？」

視界が滲んだ。私には何も応えられない。ただ自分の犯した本当の罪によく気付いた。私にとって都合のいいだけの思い出が塗り替わる。私がアイコに対してどんな仕打ちをしてきたか、思い返した記憶が私の瞳を濡らし続けた。

「パパからこの実験について聞いたのは、その時だった。パパは本当に愛されるために私を愛さないと聞いた。その一方で愛子はサンプルのために、何があっても愛するのだと。双子のどちらを選ぶか、そこに作為はなかったと。つまり偶然。この部屋へ閉じ込められているのが私であることに、何の意味もないのだと。私はこの時初めて知ったんだ」

話しているアイコの表情を見て、きつと今は私も同じ顔をし

ているのだろうと思った。

アイコの手が私の頭を掴み、もう片方の手が、私の逸らされた首に当てられた。首筋に冷たい感覚。アイコの手に握られた破片の切っ先。

死を悟った。私はアイコに殺されなければならない。でなければアイコは救われない。ごめんなさいと謝罪することすら自分勝手な暴力だ。私はこれ以上、自分を楽にさせてはいけない。私はそつと息を吐き、瞼を閉じて、最後にただ一つだけ、

「ありがとう。その手鏡、ずっと持っていてくれたんだね」

初めて出会った日のことを、今でもはつきりと覚えている。言葉もろくに話せなかったアイコ。私のことをパパと呼び、他人の顔の区別がつかないどころか、自分の顔まで知らなかったアイコ。私はその日初めて、アイコに自我を与えたんだ。私の持っていた、その手鏡で。

今、その破片が私の喉につきつけられている。もしもこの日の思い出に殺されるなら、本望とは言わないまでも、仕方がないと諦めもつく。私は息を止め、殺されるのを待つ。鼓動が最期の時を刻むように懸命に動き、その数をひたすら数えた。けれどいつまで経ってもその時は訪れない。

首筋から、ゆっくりと鏡の破片が離される。

「やめた」

私の背中から重みが消え、目を開けるとアイコは転がっているカードキーを拾い上げていた。

「殺さ、なかったのか。まさか。愛子が！ あはは、ははは！」

細い呼吸も絶え絶えに、父が声を上げて笑った。まだ生きていたのか。すでに体温も下がりきっているだろうに。そんな父には一瞥もくれず、アイコは扉を通って出て行く。

「愛子たちはここに閉じ込めることにするよ」

アイコが錠にキーを通すと、無機質な電子音とともにロックがかかる音が冷たく響いた。

「ばいばい」

それだけ言って、アイコは階段を上っていく。その背中を見送りながら、私の手にいつの間にか鏡の破片が握らされていることに気付いた。長い地上への階段の音が少しずつ遠ざかり、やがて消える。アイコにとつて初めての外の世界。今はもう夜も更けているだろうし、あの格好のままではきつと寒いだろうけど、それもまたアイコが少しずつ取り戻していかなければならない感覚だ。

だから、これでよかったのだろう。

「実験は、成功、したのか……。は、はは！ 愛子が、まさか、サンプルを、な」

父はようやく息絶える。私は父の懐から携帯電話を取り出し、一一〇番にコールをかけた。住所と簡単な現状だけ伝えて一方的に切った。この事件についての詳しい説明は少しずつ、後でゆっくりすればいい。結局私は死ねないまま、生きることになりそうだった。

携帯電話を血の海に投げ捨てた。私は壁にもたれながら、点々と赤く染まったこの部屋の惨状をぼんやりと見渡して、この床

の血がゆっくりと流れていることに気がついた。どうやらこの部屋全体がゆるやかに傾斜しているらしい。この部屋の奥にはシャワーやトイレまでついていて、だからきつとこの傾斜は排水口にでも向かっているのだろう。

いつもアイコはその奥の死角から本を取り出し私に返したものだ。そういえば図書館から借りてきた本は、ちゃんと返却しなければ、警察が来る前に、せめてそこにある本が血で汚れないようにしたいと思った。こんな状況のなかで冷静にものごとを考えている自分が少し可笑しい。

ずいぶん疲れて呼吸が苦しい。救急車もついでに呼べばよかったと思うけど、後の祭りだ。それでも私は這うようにしてこの部屋の奥の角を覗き込む。

ああ、あった。ちゃんと二〇冊きっかり揃っているし、ここまでは血も飛ばなかったようだ。綺麗とまではいかないが、元々こんなものだったろう。だけど、そこにあったのは本だけではなかった。

見ただけで、それが一人分あるとすぐにわかった。乱雑に、ちんまりと積まれた骨と骨。見るからに軽そうで、吹けばからからと崩れてしまいそうなそれが、積まれた本の向こうに散らばっていた。その隅に、ぼつんと頭蓋骨がひとつ。

きつと疲れすぎたせいだろう。これを見てもさほど感情は動かななくて、ただ納得がいったことが一つある。それは、まさに今この状況が元々あるべき姿だったのだということだ。今日よりもずっと前から、檻の中に囚われていたのはきつとアイコ

ではなく私の方。そして同じようにまた父も、ずっと昔からこの檻に囚われていたのだと思う。

けれど私はここを出て、この先もずっと生きていく。私が死ぬべき理由は、アイコが持ったままどこかへ去ってしまった。それが当面の私の生きる理由になるだろう。やはりアイコは私にとつての全てで、私はアイコのことを愛している。あんなにややこしいだけの無意味な父に比べれば、それくらいシンプルな結論でもいいだろう？

さて、それでは初めましての挨拶だ。私はこの骨の山に向かって精一杯の微笑みを作り、愛を込めて言う。

私はいい子になれない悪い子で、名前はアイコ。産んでくれてありがとう、ママ。